

2018/12/16

## 「心に掛かった覆い」

「あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。」(Ⅱコリント 6:12)

人はつらくなると、自分以外の何かのせいにしたがります。しかし聖書は、つらさの原因は誰のせいでもなく、自分自身にあると教えています。それが、「自分で自分を窮屈にしている」ということです。

かつて、オオカミに育てられた少年が保護されましたが、結局彼は、自分はオオカミだという思いから抜け出すことができず、亡くなってしまいました。また、「みにくいあひるの子」という物語は、あひるに育てられた白鳥の子が、他の兄弟とまるで姿が違う自分は何と醜くダメな存在なのかと苦しむ様子を描いています。これらの話は、思い込みというものがどれほど自分自身を苦しめるものかということを教えてください。

人は誰でも自分のフィルターを通して物事を理解するため、どのようなフィルターを通して見るかで理解は大きく変わります。間違ったフィルターを通して物事を見ると、本来苦しむ必要のないことで苦しむことになってしまうのです。聖書はこのような思い込みのことを、「心にかかっている覆い」と呼んでいます。私たちはどのようなフィルターのついたメガネをかけているのでしょうか。

### ■あなたがかけているメガネとは

私たちは日頃、他の人にどう思われるかを基準に、自分の姿や言動を決めています。日常的に人と自分を比べ、比較によって良いか悪いかを判断し、自分を良いものにしていきます。より良くしようということは同時に今の自分ではダメだということになります。こうして、人は皆無意識に「自分はダメなものだ」というメガネをかけているのです。

ところが、「自分はダメなものだ」という思いと同時に、それに反発する思いも生まれ、さらに比較によって自分はダメじゃないことを表そうとします。人を裁いたり、争ったりして、自分を高くしようとするのです。その結果、憎しみや嫉妬が生まれ、殺人や戦争に発展し、苦しみのあまり自ら死を選ぶ人もいます。私たちにとって有害な罪の行為はこのように生じているのです。

つまり、自分をダメなものと思うメガネこそ、自分を苦しめ、様々な問題を引き起こす要因であり、自分で自分を窮屈にしているものの正体です。

これは、心理学でも同じように分析されています。心理学では、人が人と関わる態度は、次の4つのパターンに分類されます。

I am OK. You are OK. (私は良きもので、あなたも良きもの。)

I am OK. You are not OK. (私は良きもので、あなたはダメなもの。)

I am not OK. You are OK. (私はどうせだめだけど、あなたは立派です。)

I am not OK. You are not OK. (私もあなたもダメなもの。)

この中で、最も理想的なのは1番の「I am OK. You are OK.」なのですが、多くの場合、人は「I am OK. You are not OK.」の態度を取ります。ただし、いずれの場合にしても私たちは、自分のことも人のことも、「良い」か「悪い」かのどちらかにしか判断せず、さらに、すべての人は自分のことをダメだと判断していると言われていました。

なぜ人は「自分をダメなもの」と見るのでしょうか。それは、私たちの命が有限だからです。たとえクリスチャンであっても、この世界において、命は必ず滅びるものであり有限です。有限であるということは、時間に支配されているということです。そして、時間は私たちに結果を要求し、結果を出さなければ愛されないという仕組みを作り上げたのです。頑張ったらほめられるのも、結果が良ければほうびがもらえるのも、この世界が死に支配されているからです。結果とは、「人々の期待に応えられる」という意味で、聖書はそれを「行い」と呼んでいます。私たちは、幼い時からそういう教育を受けてきたため、それらによって人の価値を判断するしかなくなってしまうました。良いものは賞を受け、ダメなものは罰を受けるのが、皆当然だと思っています。

しかし、すべての結果を出せる人など一人もいません。そのため、人は期待に応えられない経験を繰り返し、「期待に応えられない＝ダメなもの」という認識を持つようになりました。「あの人のように頑張れ」というのは、無意識のうちに「お前はダメなもの」というメッセージを伝えています。こうしてすべての人が「自分はダメなもの」と思い込み、なんとかして自分を引き上げようとする行動パターンを取るようになったのです。

私たちが自分をダメなものだと思う原因は、すべての人が死ぬからで、聖書は、「死のとげは罪」あるいは「死の恐怖の奴隷」などという言葉で、人に死が入り込んだことが私たちを苦しめていると教えています。

この「自分をダメなものと思うメガネ」をはずさない限り、私たちは自分で自分を苦しめ続けます。ところが、これは無意識の中にある思いで、誰もメガネをかけていることにすら気づいていないため、メガネをはずそうとは思わず、とにかく相手が悪いと外側を攻撃し続けます。しかし、そんなことをしても、最終的には自分で自分をダメだと思うところに帰ってきますから、一時の効果しかありません。

## ■「罪には罰」というメガネ

「自分をダメなものと思うメガネ」とは、別の言い方をすると「罪には罰」というメガネです。私たちは、良いものに対しては賞があり、罪を犯せば罰があるのが当然だと思っています。今年もノーベル賞の表彰が行われ、凶悪な犯罪に対する裁判に人々の注目が集まりました。誰もそれを不思議に思わず、皆そういうものだと思っています。だから神も私たちに対

して同じようになさるのだろうと、自然に思い込んでいるのです。

ところが、神が持っているメガネは全く違います。神のメガネは、「罪にはあわれみ」というメガネです。神は、どんなことがあっても、あなたは良きものだとしか思いません。神があなたを良きものとして造ったからです。もし、良きものが罪を犯したのなら、それは悪いものになったのではなく、死が原因で病気になったということであり、本来の健康な姿に癒そうと考えるのが神なのです。

ですから、「罪には罰」というメガネで御言葉を読み、神を理解しようとする、正しく理解することができません。神は罪を罰するに違いないと思い込み、こんな自分は愛されていない、罪を隠さなければと考えるようになり、ますます苦しくなってしまいます。そして、天国に行くには良い行いをしなくてはならないという間違った考えがはびこるようになったのです。その結果、宗教改革が起こったわけですが、結局人は「罪には罰」「自分はダメだ」というメガネをかけたままなので、クリスチャンになっても悪いことをしてしまう自分は本当に天国に行けるのだろうかという不安を抱き、結局自分で自分を苦しめるところに戻ってきてしまうのです。

聖書は、ここから脱出する方法を次のように教えています。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」

(Ⅱコリント 5:16)

人間的な標準、つまり「罪＝罰」という見方をするのはやめましょうということです。なぜなら、それが自分の心で自分を窮屈にしている原因だからです。

「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。」

(Ⅱコリント 6:14)

ローマ人への手紙には、「この世と調子を合わせてはいけない」と書かれていますが、同じことです。「不信者」も「この世と調子を合わせること」も、人間的標準である「罪＝罰」という物の見方をすることを指しています。それをやめなければ、神のことばが見えなくなってしまうからです。

「かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです。」(Ⅱコリント 3:15)

「モーセの書」とは聖書のことです。聖書を読む時、人々の心に「人間的標準」すなわち「罪には罰」という覆いが掛かっているために、聖書を正しく理解することができないと指摘されています。

この「罪には罰」というメガネで聖書を読んだ結果、多くの人が、アダムが罪を犯した罰として死が与えられたと理解するようになりました。そして、アダムが罪を犯した時、私たちもアダムの中であって罪を犯したため、私たちも罪を犯すようになり、その罰として死の体を背負っているのだと理解するようになったのです。しかし、それは、そもそものメガネが間違っています。神は、罪に罰を与えることなどしないからです。神にとって、罪は病気であり、あわれむものであり、癒す対象です。神は人の罪を癒そうとして、アダムをエデンから追い出したのです。そして、罪を癒すために、救い主を与えると約束し、その約束通りキリストが来られ、私たちの罪を背負って十字架に架かれたのです。

ノアの時代に、「神が人を造ったことを悔やんだ」と聖書にあります。「悔やむ」と訳されている「ナーハム」という言葉は、「あわれむ」という意味もあります。つまり、「罪には罰」というメガネで聖書を読んだため、神は人々の罪に怒って罰として洪水を起こされたのだと理解し、「神は人を造ったことを悔やんだ」と訳したわけです。しかし、実際にイエス様の時代には「ナーハム」は「あわれむ」という意味で使われていました。ですから、「罪にはあわれみ」という前提に立ち、「神は人を造ったことを思いめぐらしあわれまれた」、その結果、救いの方として箱舟を用意したと理解するべきなのです。

人間的な標準で聖書を理解することによって、クリスチャンの7割が自分は本当に天国に行けるかどうか不安を抱いていると言われます。自分の行いを見て、自分はダメなクリスチャンだと思ひ込み、勝手な律法主義によって、私は愛されないと自分で自分を窮屈にしているのです。聖書は、イエスは主と告白する人は皆永遠のいのちを持ち、天国に行くことができると教えています。神様はあなたを愛してやまないのですから、自分で自分を窮屈にするのはやめましょう。

## ■人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれる

「しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。」(Ⅱコリント 3:16)

「人が主に向く」とは、いったいどういうことでしょうか。当時、イエス様が取税人や遊女のような罪人たちと交わることにつまづいた人々に対して、イエス様は次のように言われました。

「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

(マルコ 2:17)

神と私たちの関係は、医者と病人の関係です。多くの方は、軽い風邪くらいでは医者にかかることはしません。私たちが医者のもとに行くのは、自分ではどうすることもできない病気にかかった時です。同様に、私たちは自分の罪に気づいても、たいしたことはない自分

で判断したり、自分でどうにかできると思ったりする時には、神に助けを求めようとはしません。自分ではどうすることもできないと打ちひしがれなければ、神に助けを求めようとはしないのです。

つまり、「主に向く」とは、神を信じ、罪に気づくだけでなく、自分ではどうにもできないと絶望して主にあわれみを求められるかどうか、カギになります。一生懸命祈ったり、御言葉を実行できるよう努力したりすることではありません。神以外にはどうすることもできないと打ちひしがれ、「主よ、どうか私をあわれんでください」と叫ぶ時、あなたの心は神に向いたというのです。

つまり、絶望する勇気があるかどうかが問題なのです。しかし、私たちは、自分の罪がわかって、絶望を回避しようとしてしまいます。なかなか、罪を認めたり、向き合おうとしたりしません。私たちが見つめる先は、自分か、外かしかありません。自分自身を見つめない人は、自分が罪人であろうがおかまいなしで、いつも外の人が自分をどう思うか、どうすれば良く思われるかを気にして生きています。それは人の目の操り人形です。自分を放棄し、自分を捨てて生きているのです。

自分を見つめましょう。何かを必死に頑張ることや快樂を求めることで、目をそらすことはやめましょう。あなたのいのちはあなたが管理しなければなりません。自分を見つめることができれば、自分は神が求める良い行いができない惨めな人間であることに気づきます。これがカギです。その時神に心を向けることができるのです。このことに気づかなければ、神に心を向けることはできません。

必死になって神に助けを請うとき、私たちは罪が無条件で赦されるという体験をします。「神様、助けてください」とあわれみを請うとき、理屈ではなく、平安が与えられます。祈れば必ずそれを体験できます。絶望して助けを請わなければ、本当に罪の赦しを理解することはできません。これが福音です。この時、覆いを取り除けられるのです。

「罪＝罰」という思い込みを捨てるには、罪が赦される体験をするしかありません。私たちは「罪＝罰」という覆いを持っているために、絶対に罰せられると思って、なかなか私たちは神もとに行こうと思わないものです。でも本当に自分の罪と向き合っとうしようもなくなったら、「主よ。助けてください。」と叫ぶしかありません。その時、私たちは罪が赦される経験をし、ダメなものとして裁かれるのではなく、良きものとして祝福されるのです。こうして覆いを取り除けられるのです。

旧約聖書のヤコブもモーセも、自分の無力さに絶望し、自分の罪に打ちひしがれて、神のあわれみを請い、赦され、祝福される体験をしました。この時、「自分はダメなもの」というメガネが壊されたのです。パウロは、自分の罪に絶望したことによって、神の赦しを知り、愛されていることを知った様子を大胆に告白しています。ヨブは、自分の罪を差し出した時、神の罰を受けるどころか倍の祝福を受けました。

病気が重ければ重いほど、癒された実感は大きくなります。風邪が癒されたくらいでは、癒された実感はわかりません。イエス・キリストの十字架は、私たちのどうにもならない罪という病を癒してくれます。私たちの覆いを取り除けられるためには、絶望するほどの罪が赦されたという実感が必要なのです。絶望する勇気、神にその罪を差し出す勇気が必要なのです。

## ■信仰とは

多くの人は、信仰とはイエス様の教えを理解するものだと思っていますが、そうではありません。

大切なことは、教えを理解することでも、イエス様を知ることでもなく、あなたがイエス様を信頼できるかどうかです。

教えを理解し、イエス様を知ること、イエス様を信頼できるようになるかもしれません。イエス様を信頼することによって、教えを理解し、イエス様を深く知ることができるようになるかもしれません。しかし、大切なことはイエス様を信頼することだけです。その信頼は、本当に絶望した時にしか生まれません。この時、イエス様と生きた人格の交わりを通して、「罪にはあわれみ」という生きた体験をすることができ、覆いは取り除かれます。

イエス様につまずくのか、信頼するのか、神が私たちに問うておられるのはこれだけです。これが信仰です。